
スノーボーダー ～雪まみれ物語～

葉月ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スノーボーダー　　＼雪まみれ物語＼

【Nコード】

N7505D

【作者名】

葉月ちゃん

【あらすじ】

大学3年生の大木紫苑は冬休みの間、北方スキー場にアルバイトをすることになった。そこで見回りの仕事を言いつけられスノーボードをやり始める。その練習中に出会った不思議な男、佐藤翔太にスノボを教えてもらう事になったが……。

「……え、と言うわけでこれからこの北方スキー場に冬の間勤務する事になりました、大木紫苑さんです」

オジさん、オバさんだらけのレセプションホールにおずおずと入ってきた女性は、まだ高校を出たばかりの様な童顔だった。

「えっと……大木 紫苑^{シオン}です。スキー・スノーボード共に初心者ですがこれから頑張っ^てて習得しようと思います。あつ、よろしく願いします」

パチパチパチ……………

ヤル気の無い拍手の後、館内を案内してもらった。

「こちら食堂です、50人座れます」

「へえ〜」

「んでこつちが源泉かけ流しの温泉です、露天風呂もあります。この掃除もお願いしますね」

「はあ……女風呂ですよね？」

「当たり前です」

ピシヤリと言い返されてしまった。

はは…

そしてゲレンデに出てきて、

「そして、捻挫してしまったり骨折してしまったお客様を運んだりする仕事もあります」

「それって……スノーモービルですよね？」

「が、あなたはお客様の様子を監視する役です」

「はい??」

「つまり、スキーかスノーボード出来なければいけません」

「…………ええええええ……………」

雪山に虚しく響き渡る諦め声……………

「ちえっ、なんであたしがこんな予想外の出費なんか……」
ぶつぶつ言いながらスノボの靴紐を結んだ。

「よし」

緩やかな坂の上でなんとか立ったが、両足が固定されている為うまくバランスが取れなくて、

ズザァー

と、数メートル滑って転んでしまった。

「いってえ……んしょともつかいやる」

まだまだ、と立ち上がってまた滑ろうとした時、

「何やってんねん!!」

なんて言葉と雪球が飛んできた。

「痛っ、誰もう!」

「オレや。お前、スノボ分かってるんか?」

紺色のジャケットと黒のスボンと言うスタイルの男性がゴーグルを外しながら言った。

うわぁ意外とイケメン……

顔のパーツが全て整っていて、切れ長の目が怒ったように睨み付けている。

「あゝ、昨日スノボ買ったばかりで分かってるわけ無いじゃない、じゃあ、あなた私にスノボ教えてよ」

「ああ?何ゆーとんねん、そんな事言われんでもきっちり教えるわい」

……何かこいつムカつくけど、ま、いいや無料で教^{タダ}えてくれるなら。
「って言うかあんた誰?」

「気付くの遅っ、まあええわ、オレは佐藤翔太。こう見えてもいっぱいしのスノーボーダーやで」

「へえゝ、知らないけど。私は大木紫苑、よろしくね」

「ああ、よろしゅうな。じゃ、早速始めるとするか」

「何から?」

翔太はずっこけた。

「何からってオメー、スノボの滑り方やるが！他に何教えるゆーねん！！」

雪まみれで立ち上がった翔太の鋭いツツコミ！を何とかかわして謝る。

「すいません……」

「よっしゃまずは真っ直ぐに滑る事から、はいやってみい」

「え〜〜〜〜」

「えー、やない。ほれほれ」

「よ、よーし」

唇をなめてまた滑ってみた。けど、

ズザー

5メートルほど滑って周囲に雪を撒き散らただけだった。

「だめだそれじゃ、もつと力を抜いて滑ってみい。全然違うで」

「んなコト言われたって……じゃあお手本見せてよ、お・手・本！」

「ちえっ、しゃあないな……こっち来い！お手本ってのを見せてやるよ」

そして付いて行くとハーフパイプがあった。

「えっここつて上級者用のハーフパイプじゃない、こんなのできるわけ……」

「あるわい。言ったやろ、『いっぱしのスノーボーダーやで』って」
そう言うのと翔太は滑り出していた。

まず右側の坂に向かうと、その坂を一気に駆け上がり空中に飛び出すとボードの端を持ってなるべく空中に留まる。

次の坂も、次の坂もすごい大技を披露して下で止まると、
「すつつつごーい！！えー何でそんなのが出来るの〜？」

と、上で紫苑が大騒ぎしていた。

しかし、そんな事は気にせず翔太はガリガリと頭を掻いた。

「ちとやり過ぎやな……調子乗ってしもた。おい、ゲレンデに戻るで！早^{はよ}う来い」

「えゝ、怖い！無理！」

「無理ゆーな、大丈夫や！」渋々と言った様子でボードを足に固定し、翔太に言われたとおりに力を抜いて急な斜面にゆっくりと滑り出した。

「ひゃゝゝ、意外とスピード出てるうゝゝ。うへえー」

「わー！こっちな来んなアホ！わっ、コントロールしろ！曲がれよ！曲がれってボゲエ！」

すんでの所で猛スピードの暴走スノボを何とかかわした翔太は遠ざかって行く小さな背中に叫んだ。

「アホ！何しとんねん、早う止まらんかい！！取り合えず曲がれ！体重を背中からお腹側に傾ける！！」

紫苑は濛々と巻き上がる雪がゴーグルを打ち付けるビシビシという音に混じって聞こえる翔太の声を聞きながら、必死で曲がろうとしていた。

（た、体重を背中側に傾ける……）
すう

つとあっけなく曲がれた紫苑は驚きのあまり、前を見るのを忘れていた。

結果、

ドッシーン

と木の幹にぶち当たった。

目を回している紫苑の所にすうつと横付けした翔太はそんな紫苑を見て呆れ果てた。

「やっぱアホや。運良く曲がれたからって前見とらん馬鹿がどこに居る？」

「う……………」

気が付いた紫苑は救護室にいた。

「あの……誰が運んで来てくれたんですか？」

「え？佐藤さんよ、お姫様抱っこで。いいわねー若いつて。私なんかもーメタボで困ってるのよ」

おばさんの他愛ない悪戯（？）で顔が真っ赤になった紫苑だった。

ゴシ……ジャージャー…ゴシゴシ……

「手が冷てーよー（泣）、今度掃除と偽って絶対お風呂入ってやる」「大変なこって」

くぐもった声が壁の向こうから聞こえた。

「さーとーうー、私がこんなに手え冷たくして頑張ってるのにお前めえはー」

「はいはい、1人ゆったりと露天風呂満喫してますー、へっ、どうだ！羨ましいやろ」

「……んもー、ずる過ぎ」

佐藤翔太が居なければ超人見知りの私は馴染めなかっただろう。

そこんとこだけ感謝してるけど。

「お前も早く滑れるようになれよー、あつ、その前に冬終わるわな」この意地悪い性格を何とかすればな」。

頭痛が……。

次の日、翔太が来るまでの間にさつさと仕事を片付けて（雪かきだったりスキー&スノボの貸し出しだったり、果ては迷子の子供の捜索まで……）、

練習したかったのだがやっぱり着けた所で翔太が来てしまった。

「何や、まーだ練習もしらなかったん？ま、それはさて置き、今日は初級者コース行ったらええで」

「えっ、止まれたらじゃなかったっけ？」

「んー、こういうのは体で覚えた方が良いんや」

「その前にリフトの乗り方教えてよ」

「あそつか、まず片方の靴を外してみ」
「自分も外しながら言った。」

紫苑が外したのを確認すると片足で地面を蹴ってリフトに向かった。
振り返ると紫苑がとんでもない方向に行っているのが見えた。

「何しとんねん、早う来んか」

そのとんでもない方向とは、今朝紫苑が寒い寒いと言いながら必死で雪を除けた所だった。

「何でこーなるの〜」

ベッシャーン

「あちゃ、やりおった」

雪まみれの紫苑は、溶けかけてきた雪で冷たいやら濡れるやらで最悪だった。

「もうヤダー、ぐっしよりだし〜」

「何言うとんねん、お前は左に行く癖があるから右に右につて意識すればいいんやで。はい、分かったならさっさと立つ!」

「…せめて手とか貸して欲しいな」

「立つ訓練にもなるから貸さない」

「ちえっ」

立とうとしても左足が固定されているので上手く立てないどころか、逆に坂の下の方に滑ってしまう。

「コツとか無いの〜?」

「んなこと言われても……もう一方の足で踏ん張ってみたらええんとちゃう?」

「雪だから滑っちゃうの」

「そうだったらもう自分で見つけてって言うしかないやんか」

右足で踏ん張って立ってみようとするが、どうも滑って上手く立てない。

そこで、足元の雪を踵で崩して踏ん張れるようにして立った。

「やった!ほら自力で立ったよ!!」

「ほーようやったやないか。次はリフトやで」

やっと褒めて貰えたと思ったら、もう次の課題。

リフト乗り場に行くとモーター音が否でも聞こえた。

「何か…モーター音が怖いね」

「そうか？慣れたらこんなもんやで。さっ、行こか」

リフトはゆっくりと回りながら、乗る人々を待ち構える。

線まで進むと自動的に（つーか至極当たり前に）椅子が近付いてきて、膝裏に当たる。

「そこで座る！」

急いで座ると下からすくい上げるように椅子に座れた。

「ほっ、座れたー。あゝすごい高いー！」

ゆっくりと動くリフトは次第に高くなり、さらに吹雪で周りも見えなくなった。

「いつもこうなの？」

「え、吹雪のことか？ああ、いつもこうや。たまには晴れたらええのにつて思てんねん^{おも}」

「晴れたときってどんな景色？」

「もゝ最高や！いつでもWelcomeっちゅー感じや！」

翔太がそんなに言うんならきつと綺麗な景色なんだろうな、と思いながら真っ白の世界を見ていた。

「もうすぐ終着やから、スノボ真っ直ぐしとき」

「何で？」

「何でって、すぐに次のリフトが来るから前のオレらは邪魔やから退かんと、なっ」

「あそつか…」

その会話から間もなく終着に到着したが、真っ直ぐに滑っていたため、前の吹きだめに突っ込んだ。

「馬ゝ鹿、へへ、二度も同じコケ方しとるわい、はははっ」

「……………むゝ」

雪まみれで文句を言い返す余裕も無いほど自分に呆れていた。やっと笑ってくれたと思ったなら、笑われていて。

不貞腐れて頬を膨らせた。

「そんな顔しても可愛くないで、ほらスマイルや、スマイル！」

にっと笑いかけて頬をつつかれたら、そりゃもう笑顔になるしか無いでしょ。

「分かった、笑顔でしょ、笑顔」

にこっと笑って立ち上がった。

「ほい、まずはもう片方の靴を嵌めてみ」

パチン

「はいOK」

「んじゃ次はこっちの斜面で左肩を下にして滑ったら、背中側に体重をかけて曲がる。ええな、その後止まれないだろうからこける」

「えー、コケるの。ヤダ、雪まみれになるもん」

「もともと雪まみれやんか」

「それはそうだけど…」

言い返されて何も言えなくなってしまった。

「つべこべ言わずにとっとと滑る！はい、行けえ」

ドシン

後ろから背中を押されて、勢いで右肩から滑り出してしまった。

「ちよっとジャンプして向きを変えろ！！右肩からになってるで！」

！

バフツ、バフツ

大分慣れてきたみたいでちよっとのジャンプですぐに左肩を下に出た。

（で、次に背中側に体重をかける……っと）

ズサー

「わっ、曲がれた曲がれた。やった！」

「やったな！ほな次止まれ！コケろ！」

ベシヤ

「言う前にコケてた…か」

半ば諦めたように言った翔太の言葉も、白い息になってフワフワと

漂っていく。

「さーやったよ！！次は何やんの？」

下の方で転んでいる体勢のまま、首だけこちらに向けて叫ぶ紫苑。
ザザッ

滑って、丁度紫苑の上にピタリと止まった翔太のスノボは、更に紫苑に雪をかける事になった。

「ぶはあつ、ヒドーイ！何もそんなにやる事無いでしょ」

「あ……あかん、ごめん」

謝ってふと周りを見ると、滑っている人全てがこちらを見ているのが分かった。

「ちっ、人がようけ来とる。おい、ちよっくら休憩して様子見るで」

「えー、もうちよっと滑ってからにしようよ」

「こんな人がいとるんじゃ、滑りにくいんや、オレは！」

「悪かったですねー、ずばらで。でもまだ下まで教えてよ」

「そりや教えますとも、お嬢様」

「皮肉はいいから」

「へいへい、んじゃ次はさっきと同じように左肩から滑って、今度は腹側に体重を傾けて右側に曲がるんや」

「OK」

また立って、反対側に滑り始めた。

ザザッ、ズサー

さっきより上手く滑れてるなあ、と思ったら勢いが弱くなったらしく途中で止まってしまった。

「？」

ザザザー

翔太が滑ってきて、後ろからどつかれた。

「やったなあ、やっと止まれたな。オレの教え方が上手かったからやるな」

うんうんと頷きながら翔太は、己の教育の上手さに感心していた。

「違う！私の運動神経の良さだよ」

「まーだアマの奴が何言うてんねや、も・ち・ろ・ん！オレの指導のお陰や」

「それはそうだけど……」

どや！と、勝ち誇った顔をしている翔太に敗北感を感じている紫苑だった。

（ま、負けた〜）

辺りはすっかり暗くなり、ライトだけが点々と山に灯っていた。流石にこんな遅くまで滑っているのは私と翔太だけだった。

「うつ、寒っ」

「当たり前でしょ、冬なんだし」

口々にそう言いながら、人の居なくなった操縦室を尻目に、リフトに乗り込んだ。

「お前、一回目よりかなり上手くなったんとちゃう？」

「そ、そうでしょー。私ってば運動神経イイからね〜」

「そのセリフ、どっかで聞いたよーな気がするな〜。誰の言葉だったけな〜」

チラッとこちらを見ながら、嫌味たつぷり配合で翔太は言った。

「っるっさーい！もー馬鹿、佐藤翔太のバーカ！アホ！」

言い返すと、ゴンドラが揺れた。

「きゃっ」

丁度高いところだったので、思わず翔太にしがみ付いた。

「ゆっ、揺らさないでよ〜。怖いっっ」

「あはははっ、おもしれー。大木って高所恐怖症だったんだ〜」
面白がって更に揺らす翔太。

怖がってキヤーキヤー叫ぶ紫苑。

気が付けば、随分と強く翔太にしがみ付いていた。

「あっ、ご、ごごごめん！邪魔だったよね！」

真っ赤になっ飛び退こうとすると、腕をがっちり掴まれていて抜け

なかった。

「なななな何っつ!？」

めっちゃめっちゃ動揺して翔太を見ると、腕を掴んだままこちらを向いていた。

「え…………、何？」

翔太、めっちゃ笑顔で（真顔で）。

「こうしてた方が暖かいやんけ」

…………… っ、それだけかい!!

嗚呼、翔太と出会ってからツツコミが上手くなったなあ…………。

げんなりして、動揺した自分が恥ずかしくなった。

ああバカなのはあたしです。

私と翔太は、また一回滑ってからリフトに乗った。

流石に夜は冷えるし、おまけに吹雪いてきた。

「さゝぶゝいゝ、死ぬー！凍え死ぬゝ」

「この位いつもやんか」

「知るか、そんなん！顔が凍るゝ」

ヒュゝ、ビュゝ

風の音だけが木霊する。

木の梢がビシビシいう音が聞こえる。

雪と寒さだけがゲレンデを支配していた。

「うゝゝ、コレ滑ったら今日のレッスンは終わりにするではよ滑る、凍るわ」

「やたっ、んじゃー早く滑っちゃおっと」

ザサー

ザッ

2つの影だけがゲレンデを滑ってゆく。

先に下におりていた翔太は、あと5分は来なそうな紫苑を待つ気はあまり無かったようだ。

先に建物の方へ行ってしまった。

「ひつどゝ、あーいう薄情な人間にはなりたくない」
ひゅゝ、びゅおおゝ

1人きりになったゲレンデでは風が大きく聞こえる。
1人ではこの広いスペースは寂しいだけ、虚しいだけ。
ズザッ…ベシヤ

「やつぱ、あんなんでもいた方がマシか……」
半分雪に埋まりながら呟いた。

心も周りも、薄ら寒い冬の夜更けだった。

それから1週間、昼間はスキー場のアルバイトをし、夜は終わりでスノボの練習に明け暮れていた。
そのせいか持ち前の運動神経の良さは知らないが、メキメキ上達した紫苑は中級者コースを（なんとか）転ばないで滑れるようになった。

「へへっ、楽勝楽勝」

初級者コースで腕ならしをして、ちょっと中級者コースを滑り降りた紫苑は、リフトの所でゴーグルを外しながら言った。
ザッ

「ほゝ、大分上手くなってきたやないか」

「もっちゃん！最近なんだか楽しいし、面白いよね」

「おもしろなかつたらスノボやってへん、どや！上級者コース、行かへん？」

このスキー場の上級者コースは、かなり難易度が高いと聞いていたので、

「えゝ、怖いからヤダ！」

と、にべも無く断ったが、

「ええやん、行くで！」

と、上級者コース専用のリフトの方に引っ張って連れて行かれた。

「ひゃゝゝ、おーたーすーけーをゝゝゝゝ」

夜の雪山に虚しく響き渡る許しを請う叫び……。
寒っ

「…だからイヤだって言ったのに」

上級者コース（山のとっぺん）は、とてつもない吹雪で周りなんか見えやしなかった。

「こりゃ…ブリザード並だな」

「ブリザードなんて…体験したことあんの？」

「ああ、まあ…南極で」

「南極！？あんたホント何者？」

「佐藤翔太ですが何か？」

「もついい……。早く滑っちゃおう
ザッ

先に滑り出したトコまでは良かったのだが、10m進んだとこで地面がぐつと下がった。

「あっそこは…やめ！転べって！！その先はキツツイ山の斜面やで！！」

「さ…先に言え〜〜！！」

ザッガガッ…ボスッ

やっと転んだ所は、柵の目の前。

崖の5mほど手前だった。

「ふー、危なかった…」

ザッ

「ほんまオレのゆう事聞いとらへんかったからやで。手間かけさすな」

ゴーグルをしているせいか、全く表情が読めない翔太に少しふくれっ面して見せながら言った。

「あんたが先に言っただけだったのが悪いんでしょー、も〜
すると珍しく、

「まーそれもあるな…ごめん」

と、謝ってきた。

「……めっずらしー、明日雪崩起きるんじゃない？今たくさん雪降ってるし」

「なっ、なんやて！オレ普段そんなに謝ってないかな……」

「ジョーダン冗談！そんな事より、早く下降りようよ」

笑って誤魔化し、立ち上がって下の方へ滑り降りていった。

それから夜中、雪は降り続けた。

次の日、紫苑はオーナーに呼び出されて、今日からスノボでの見回りをお願いされた。

「まあ、夜よりは寒くなくていいんだけど……やっぱ、中の掃除の方が暖かくてよかったな」

独り言を呟いたとき、いきなり横から声が聞こえた。

「そやね」

「うわあっ、ななな……何よ！イキナリいつつ！！（絶句）」

「あハハハハっ、ビックリしすぎや、あーウケるっつ」

「ひっど、ってゆーか昼間に来るなんて珍しいね、雪崩になっちゃうよ。どうしたの？」

「雪崩はやめんかい！昨日から雪崩雪崩って。雪崩は恐ろしいで、どうなつても知らへんどって、語らせる気が！アホ！」

「あはは、さすが大阪人！ノリ突っ込みも上手いね」

「そっちかい！まあええわ、スノボ仲間とすべりに来たんや、文句あつか？」

「ないです……仲間ってあの人たち？」

紫苑の指差す先には、ド派手なウエアの一団が居た。

「まあそっや、見た目とちごーて意外とええ奴ばっかやで」

「ふーん、じゃあ、あたし仕事で見回り行ってくるでまた後でね！」

「後でな！」

この日は（前日に比べて《前日の気温・5度》）気温が高く、日光が照ってぽかぽかと暖かった（それでも・1度だけど）。

そして、紫苑たちが丁度滑っている時に雪崩警報が発令された。

スキー場としても無視するわけにはいかず、場内アナウンスで雪崩警報の発令を知らせた。

しかし、紫苑は森の中に迷い込んでしまった子供の搜索をしていた。そして翔太達は馬鹿騒ぎしながら集団でゲレンデを滑っていた。2人はそれぞれ違う場所で、それぞれアナウンスを聞いていなかった。

それより遙か山頂で、昨日積もった雪が解け始めてヒビが入っていた。

そんな時、上級者コースで滑っていたスキーヤーが急な斜面で転んだ。

「うわー!!」

ガッ、ズザー

その音でヒビが入っていた雪が一気に斜面を駆け下り始めた。

ドドドド...

不気味な地響きが聞こえてきた。

「...何の音ですかね？」

救護室に子供を運んで、廊下に出てきたところだった。

「さあ？ちよつと見てきてくれない？」

職員のオバサンに言われた。

立てかけてあるスノボの所まで出てきた所で丁度翔太が来た。

ザッ

「上の方で雪崩があつたんやて！早う放送で知らせなアカン!!」

「.....え？」

「え？なんて間抜けな声だしとる前にはよ！！」

「う、うん！」

ダダッと放送室に駆け込んで緊急放送を始めた。

『緊急放送、北方山で雪崩が発生した模様。至急その付近のお客様は速やかに移動してください、繰り返します…』

放送を終えて出て来た紫苑は自分も埋もれちゃかなわないと、急いで表へ飛び出した。

先に駐車場の方まで来ていた翔太は駆けってくる紫苑を見つけてホッと一息ついた。

「おい！こつちやし…」

ゴアアアツツ

目の前の紫苑や車が見る見るうちに追いついてきた白い塊に飲み込まれていった。

『雪崩に埋もれた場合、約15分以内に救助されなければ死ぬ』

レスキュー隊に連絡して、雪掻きを持って来て掘り始めた。

「く……。しょ……。う……。た……。」

微かな声は雪に埋もれ、今にも途切れそうなほど弱々しかった。

その声はかつて南極で活動していた時の事を思い出させた。

「待つてろ！今助けるで！どこや、紫苑！！」

ガツガツ

意外と硬い雪は掻き分けるのがやっとで、あまりはかどらなかった。

「くそっ、声出せ！どこや紫苑」

「こ……。こ……」

それは右の方から聞こえてきた。

ガツ…キイツ

甲高い金属の音がした。

そこを掘ると見覚えのあるシューズが見えてきた。

タイムリミット

時間まで、あと約11分。

そのシューズは右足だったが、彼女の身長（164cm）を考えると顔まではまだまだだった。

「くそっ、レスキュー隊は何やつとんねん！遅^{おせ}ーっつーの！！」

膝までは何とか見えてきたが、残り時間もあと9分になった。

「ペースアップしてかなあかんかな…」

ガツカツ。ガツがツ、ガツ。

何とかかんとか胸の下まで来たが、恥ずかしくてよく見れない。

「……なんだかんだいってこいつも女なんやな」

ガツ

「…そーゆー意味じゃあオレも男やな…」

タイムリミット

時間まで、あと約3分。

「何でここまでお約束……？」

翔太が途方に暮れたのも無理は無かった。

顔の部分だけ雪が厚く、ものすごく硬かった。

「しゃあない、オレがやんなきゃ他に誰がやる？」

自分を励まして再び掘り始めた。

今までのと強度が全く違う。

今までののは何とかでも掘れていたのに、今度のはまるで鉄板を掘っ

ているかのようにだった。

少しもはかどっている気がしない。

ガッガッ

「くそつ、早^{はよ}せんと時間がのうなる」

ガッガッ

やつとトレードマークのオレンジの帽子が見えてきた。

「よっしゃっ」

けれど、ここからは素手でやらないとその人の顔にスコップがグサッ……なんてことになりかねないからだ。

ザッザッ

思うようにはかどらない自分にイライラして思わず、雪に八つ当たりしてしまふ。

「くそつ、何でや!」

拳で紫苑の顔の上の雪を素手で殴ったら思いがけなく割れた（自分の手も血がでただけだね）。

「紫苑!」

抱き上げると少し身動きしたが冷たかった。このままではマズイ……

……と思った翔太は心臓マッサージを始めた。

その内、紫苑の体がびくびく動いて息を始めた。

このままではマズイ……と思った翔太は心臓マッサージを始めた。

その内、紫苑の体がびくびく動いて息を始めた。

「う……ん、あれ翔太どうしたの?」

やつと到着したレスキュー隊の騒音に負けない大きな声で紫苑が言った。

「紫苑……」

安心した翔太は紫苑の華奢な体を痛いほど（紫苑は痛かった）抱きしめた。

「なッ、どうしたの翔太!らしくないよ」

ちよつと驚いて翔太を見ると、肩が震えていた。

「翔太……?」

「アハハハハ……あ~~~~よかった！！ほんまどうなるか思たでー！」

……ちよつとでも泣いているかと思つた自分がバカだと思つた（作者も……）。

「やっぱオレが居んと紫苑死んどつたで〜！オレってばすごい！うん……！」

「……なんかズレてる気はするけど、助けてくれてありがと♪翔太」
「朝飯前や！どーだ、感謝せい！」

キュツと目を細めて笑う翔太が少しずつ近付いてつてゐる事に、紫苑は笑顔に氣をとられて氣付かなかった。

「翔太……近い」

こちらにも笑顔のままで言つた。

「はは……氣のせいや……」

そこまで言つと更に近い氣がしてくる。

「ホントに……翔太近い」

「氣のせい氣のせい……」

また更に近い氣が……もう氣じゃなくて本当です。

「わっわっ、ちちちち近〜い！！何……ん……」

焦つて離れようとする紫苑を強引に押さえてキスした翔太の勝ち！
じゃなくて、いやホントに翔太が紫苑にキスをした。

「……んっ……なっ何やってんの！？？」

「何つて……キスしただけやん、何か問題でも」

「何でそんなさうと『キスしただけ』なんて言えるの？フツ〜キスつて好きな人とだけするんでしょ！！？」

「あー、紫苑の中じゃそー思てるわけか〜、多分ご想像通りやと思うけど」

周りの雑踏が嘘のように消え、吹雪の音だけが2人を包む。

「好きやで」

あまりにもサラツと言って、まるで今日の天気を聞かれて答えただけのように周りには見えるだろう（なと思った）。

思考回路が混乱して固まっている紫苑をよそに、翔太は何度も何度も口付けた。

「ヒューヒュー、熱いねーお二人さん」

その言葉で翔太のスノボ仲間が歩いてきた。

「なっ、お前らどっから……？」

「俺たちやさつき助けられたんだ、レスキュー隊にな。で、横になつてると言われて大人しく横になつたらどっかの誰かさんが熱いチューをしているのが見えただけで。へへへっ」

「くそっ」

とか言いつつも真っ赤で照れている翔太は満更でもなさそうだった。

「ホントにコイツが惚れるのは珍しいぜ、大切にしな」

「は、はあ……？」

「さーで、元気になったことだし、そろそろTV局のカメラマンとかりポーターがわんさか来てるだろうよ。ちよっくら、取材にでも答えてやっか」

と、翔太の友達は何こうの方に行ってしまった。

「……つくづく変な人だと思うなあ」

「あれはあれで人生楽しんどるからええんとちゃう？」

「まっ、そーだね。それより放して！1人でも起きれるよ」

ジタバタして翔太の手から逃れようとするが、まったく動かせない。

「しゃーない！負傷者はレスキュー隊に引き渡すとするか！」

お姫様抱っこで紫苑を持って立ち上がった。

「やめ！自分で歩けるってばー！」

笑いながら歩く翔太に、泣き笑いしながら暴れる紫苑。

2人とも来年の冬に向かって（季節も）歩き始めた。

♪ THE • END ♪

（後書き）

なんだかんだでやっぱシリアスには出来ないなと思いました。
もしかして、もしかしたらこの続きを書けたらいいかな〜とか思っ
ちやったりしちやったりするかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7505d/>

スノーボーダー ～雪まみれ物語～

2010年10月13日04時38分発行